

## ブック・ガイド

松本通晴・丸木恵祐編『都市移住の社会学』（世界思想社、1994年6月、246頁、1,950円）

明治学院大学 石川雅典

本書は、京都市や尼崎市などに存在する「都市の同郷団体」の実証的研究を通じて、地方（農村）出身者の都市への移動と都市生活への定着の過程を論じたものである。松本によれば、都市の同郷団体とは「都市のなかで、故郷（ふるさと）をともにしている者の団体である」（10頁）が、戦前・戦後に成立した同郷団体の構造や機能などが事例研究や調査に基づいて詳細に分析されている。また本書では、日本の戦前・戦後の向都離村現象と還流現象に関する実態分析やそれらに関連する既存の諸研究が概観されるとともに、都市の同郷団体を手がかりとしながら、地方（農村）から都市へ移住してきた人たちがどのように都市的生活環境に適応・順応していくかというテーマが取り上げられている。本書自体、社会学的視点から「都市移住」を体系的にとらえようとするものであるが、ことに都市における一次的な社会関係の深さと広がりをも、「移住」という視点から再認識しようとする試みである。日本の都市社会学的研究では、1980年代から「外国人労働者・居住者問題」の文脈で彼らの日本での「定着」や「定住」といったことを問題とするテーマが登場するようになってきたが、従来の日本の近現代都市を対象とした研究は、都市を「根を失った異質な」地方出身者の集積によって成立・発展してきたと見做すだけで、全体としては産業化を背景とした生活の社会化と個人化の進展といった問題、つまり都市的生活様式にかなり力点がおかれてきたと考えられる。この意味で、本書はいわば従来の都市社会学的研究があまり目を向けてこなかった視角を喚起しようとしている点で評価される。

なお本書中では、戦前から戦後にかけて同郷団体の構成や機能、そして新メンバーの参入様式がかなり変化していることについてふれられているが、現実に生じている移住世代の交代と同郷団体の変化との関連、および団体を現代の「都市」の中でどう説明づけていくかについて、もう少し関連する記述があればよかったと評者なりに思っている。